筑紫女学園大学リポジト

中国現代文学《世界華文女作家微型小説選集》への視角

メタデータ	
	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2014-02-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/214

中国現代文学《世界華文女作家微型小説選集》への視角

石　　其　琳

A Study of Chinese Contemporary Literature in the *Anthology of Chinese Wemen's Short-Short Stories* in Chinese

Kilin SEKI

はじめに

これまで私は中国現代文学の新ジャンル「微型小説」（別名「小小説」）作品集数冊について研究を行った。今回は《世界華文女作家微型小説選集》を対象に研究したい。これまで多くの微型小説の作品集を研究対象にする理由について、既にほかの論文で触れたので、それについては省略する。

今回取り上げる作品集《世界華文女作家微型小説選集》について、特に注意したい点は二つある。その１は女性作家の作品であること。その２は世界中の華文作品を対象に集めたという点である。女性作家の作品に関しては特別とはいえないが、しかし女性作家による世界中の華文作品となれば、作品のテーマ内容にそれなりの特徴があると考える。

「華文」とは現代中国語である。「華文文学」といえば、当然華文で描く文学作品を指すのが基本である。人口数で考慮すれば、世界で最も多い読者数を持つ文学言語の一つと考えられる。しかし「華文」と言っても中国国内だけに限らず、世界中から中国系の作家たちが華文を使って多くの創作活動を行っている。世界各地で生活する「華人作者」は、「華人」という視点で現地の社会と生活を「華文」を通して記録し、描写することで「華文文学」に新たな位置づけと価値が加わり、この点は重要視せねばならないであろう。本論はこの作品集の編集または内容について、具体的に作品を取りあげながら、新たな視角で考える。

一 《世界華文女作家微型小説選集》の編集背景と意図

《世界華文女作家微型小説選集》は世界華文文学家協会理事を務める欽鴻氏によって編集され、2004年珍珠泉微型小説シリーズの一巻として、上海人民出版社から出版された作品集である。

ここでまず、この作品集の編集背景と意図について説明を加えたい。

近年中国国内における微型小説の繁栄状況を背景に、既に海外でも盛んである華文創作活動に注目した編者は、海外華文女性作家の優れた作品が多く、文学界においても「華文女性作家現象」として大変魅力ある範疇だと考え、この作品集の編集を考案したそうである。

編者欽鴻氏は1996年タイで「国際華文微型小説研究学会」に参加した当初から、既に世界各地の華文女性作家の作品を国内へ紹介する考えをもち始めたという。後に彼自身の研究範囲を中国現代文学から広く「華文文学」へ拡大し、海外華文作家と作品紹介の現実的意義と重要性を確信しつつ、編集を実現したのである。欽鴻氏が自らその「編後記」において、作品集の出版は、海外華文学界と国内の文学界との交流を深め、国内の読者も作品を通じて、海外華文作品の世界を理解できるとその編集背景で重要な意図を述べている。

この作品集に「世界」の言葉を使用するが、それは中国本土を除いての台湾、香港、マカオ地区を含める全ての「海外」地区を意味する。「華文文学」において、中国本土が最大の読者数を持つ市場であるため、台湾、香港、マカオ及び海外の作家たちにとって、自己の作品が中国本土で発表できることを望むのも当然であろう。そしてこの作品集を編集するために作品を集める際、世界各地からの熱烈な反応を受け、東南アジア諸国在住作家の作品のほか、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、アフリカなど世界各地から多くの作品が集められ、最終的に作家数が96人に上ったのである。中には多くの有名作家も含まれているが、新人作家の作品も数多く収録している。編者によれば、作品の選別にあたって、多くの無名作家の作品を収録する理由について、作品自体の内容、主旨、言語表現、構想など多方面において優れているし、それぞれ独特な創造力を持ち、今後もよい創作活動を期待できるではないかと考え、作家の名声にこだわらずよい作品を選んで収録したと作品の選別基準を説明している。

二 作者たちの出身地の特徴について

作品集は作家ごとに数編の作品を集め編集されている。各作者の簡単なプロフィールが冒頭に写真と共に明記されている。その内容によれば、それぞれの作者の「華文力」が身に付く理由背景がうかがえしれる。

作品集に「世界」とは言え、実際に96人の作者のうち66人が東南アジア地域の出身者で、また作品数を見れば、上述作者数と同じ多数を占められている傾向がみられる。さらに作者らの多くは移民の２世代以上、もっぱら現地生まれ育ちの中国系の外国人である現実が知れる。この現象は決して偶然に起こったものではないし、東南アジア地域における華人世界にあるさまざまな政

治、歴史、社会背景から生じた結果であると考えられる。

以上の現象と深く関わる背景として、まず創作に「華文」と言う言語条件が重要な要素である。東南アジア地域に関していえば、一般的移民社会に起こりうる母国語の使用伝承の問題だけにとどまらず、かなり長い年月を通して、その地域特有な歴史、政治背景が絡む複雑な問題が潜んでいる。これを背景に、当然多くの作品のテーマまたは内容にもそれが反映され、一つの特徴性として表現されている。以下はこの点を理解するために、先ず華文教育が大きな社会問題である地域の事情を簡単に触れておきたい。

三　作者たちの「華文力」と「華文教育」の関わり

作品集に東南アジア地域の作家と作品が全体の８割を占める中、さらに半分以上がシンガポールとマレーシアの出身者である。第１章で触れたように、作品集の名称は「世界」という言葉を使用している。ここに集められた作家たちは、中国本土以外の地域に住むのが条件であるため、まず第一に考えるのは、作品創作に使う言語取得の問題であろう。創作活動には当然かなりの言語力が要求される。そこで作家たちが華文力を身につけるには、それぞれが生活する地域の政治、社会、歴史的理由、背景からしてその言語力を取得する障害になる可能性があり、それに関連して他にもさまざまな問題が生じると考えられる。作者らの華文力に関する経歴を検視すれば、途中から現地へ移民した場合を除いて、現地生まれ育ちの場合、現地での華語学校に通うことが必要で、更に台湾、中国本土など華文使用地域の大学へ進学するケースも少なくはない。要するに華文教育が華人社会に無視できない基本問題の一つであると考えられる。なぜなら華文教育を受けていなければ、特定の地域に大勢の華文作家を育むことはできないのだ。

研究資料によれば、シンガポール人口では華人が８割弱でマレーシアの華人が３割ほどである。この二つの地域の華人移民はすでに千年の歴史をもっている。長い年月において、先代華人たちの移民歴史には多くの苦難と悲惨な生涯もある。また現在この二つの地域の歴史を語る場合、華人は無視できない存在である。そして東南アジアへ多数の中国人が移住し始めたのは、19世紀末から約半世紀間、第２次世界大戦が始まるまでであった。その後広東語など方言の学習を廃止し、標準語が普及したため、中国人移民の人数も増加し大規模な共同活動が可能になり、現地社会に大きな存在感を示したのだ。

さて、シンガポールとマレーシア地域で最初の華僑学校は1904年に創立されてから1937年まで1216か所に増加している。そして1954年のマレーシア独立までの約50年間をかけて、学校の規模を拡大し、小学校、中学校、大学及び女子学校、師範学校、幼稚園、職業専門学校と夜間学校を作って、完全な学校教育制度を整えたのである。

1941年までのイギリス植民地時代では、華人勢力を恐れて華僑学校を作ることが禁止されたが、それでも当時貧困地域にいる華人たちは自力で学校を作っている。その後イギリス政府はさまざまな政策で、例えば英語学校とマレー語学校には補助金がでるのに対して、華文学校には出さな

いなど、政策的に華僑学校に対して圧力をかけている。だが1938年頃、華人子女の英語学校の入学者数２.６万人は、華僑学校入学者数９.１万人の３分の１にすぎなく、さらに1954年イギリス支配下にあるマレー聯邦地域では、華僑学校の数が1550か所以上あるのに対し、英語学校は630か所にすぎないし、学生数も華僑学校の４分の３に満たなかったのである。

1942年初めからこの地域は日本の支配下になり、イギリス支配時代同様、華文教育が1944年完全に禁止されて打撃を受けたが、戦後すぐに回復を見せ、1951年頃には約2000個所の華僑学校が再建できている。しかし今度はイギリスの再支配になり、華僑学校に対する弾圧が続く中、最終的に「民族平等」を基に、華僑たちの強い信念と対抗により学校は存続し続け、現在では華僑学校が完全に定着した状況である。近年経済的などの理由で、現地の他民族移民の子女も華僑学校に入学させるケースがみられる。

華文教育では学校のほかに「華字新聞」の発行も盛んだった。1815年に最初の新聞刊物の発行以来、停刊、復刊そして新刊の繰り返しのなか、現在まで多数の新聞期刊物が発行され、この作品集に収録された作品の多数もこれら新聞、期刊物に発表されている。

以上、シンガポール、マレーシアの華文教育及び新聞期刊物の事情に触れたが、作品を検視する重要な手がかりだと考えるからである。本来移民社会における言語の壁は、生存に欠かせない困難な問題の一つであるが、しかし上述した歴史の流れと両地域の社会実態を理解することで、これらの作品に隠された、ほかの華人地域と異なる深刻な社会事情の現実と思いが、より一層洞察できよう。

四　作品テーマ内容の特徴について

欽鴻氏が「編後記」で作品の内容について、女性作家の創作特徴は最も関心ある恋愛婚姻、家庭生活、倫理道徳、子弟教育の問題のほか、民族矛盾、伝統文化、商場の波風、異域生涯など多方面が描写されていると述べた。

作者たちは居住している国の国民であるにもかかわらず、実際この作品集をみれば、現地における自我意識の伝統文化との葛藤など異域情緒を描写するテーマの作品は少なくはない。作者らは個人または家族関係により、「海外」と言う世界各地で定住している理由背景は様々だが、各自の人生において、または家族として、直面する現実問題の共通性は多く見受けられる。華文で創作活動をすることにより、どこかに自分たちの華人としてのアイデンティティを語り、主張されていると考える。

本論はこの作品集の重要な特徴である華文創作の環境に重点を置きながら、第三章で述べた現実背景をみて、華文使用に特別な社会的背景を考慮する必要がある地域の作品を中心として考えたい。よって、今回は本作品集に多く集められた中国国内環境と同様視される地域、例えば台湾、香港、マカオなどの作家の作品を除いて、それ以外の地域で移民または中国系の外国人として生きる作者たちの作品を研究対象とする。

五　作品における「華人としてのアイデンティティ」の表現

「華文力」は作者創作の手段であると同時に、重要な創作テーマ構想の原動力でもある。各作者の経歴を検視すると、およそその多くが移民の立場であり、内には既に数代も続いて、特に東南アジア地域に関しては、このようなケースが普通にみられる。華人としてのアイデンティティを持ち、それを捨てずに生きるならば、現実世界で経験する摩擦、異文化との妥協に直面しながら問題解決ができず、永遠に悩み続けなければならない生涯を経験するであろう。この作品集では多数の作品がこのテーマに関連する多様な問題提起をしている。以下は具体的に作品を取り上げ考察する。

（一）言語に関わる問題の表現

華人としてのアイデンティティを考えた場合、まず言葉の問題が浮上するであろう。以下作品の表現が特に言葉の問題と深く関わる作品を取り上げる。（※各作品の内容はすべて略訳する。）

作品①：「お爺さんのパパイアの木」　　黎紫書　（マレーシア）

主人公の彼はお爺さんが老人ホームへ行く時、手渡された手紙を目前にして呆然としていた。お爺さんが丁重に「忘れないように手紙をおくれ」と悲しそうな顔でいったのを思い出したのである。そして枯れ枝のような腕が絶えず震えながら「庭のパパイアの木に実がなったら、必ず手紙でしらせておくれ、お爺さんはすぐに帰ってきて味見したいんだ」といった。しかしその手紙には歪んでいる字で書いてあるが、彼には全然読めないのだ。

お爺さんは華文しか書けないのだ。自分の両親はお爺さんが自分に漢字を教えることに対して不満を持っている。特にお爺さんがどこからか拾ってきた華文の教科書を開いて彼に教えているのを見れば、いつも機嫌が悪く、二人で眉をしかめながら英語で文句を言うのだ。彼の父親は医者で、母親は看護長であり、両親の英語はいつも繁雑な医学名詞と消毒液臭いと彼は感じている。

お爺さんから曾祖父の生涯の話を聞いた。曾祖父亡きあと、大きなゴムの木の林を残してくれたが、価値が下がって、一番底値がついた時売り払って、そのお金で彼の父親を外国へ勉強に行かせたのだという。だから今はこの一本のパパイアの木しか残されていないとお爺さんはいつもそう呟いた。あの日お爺さんが車に乗って老人ホームへ行くとき、車中からこちらを振り返っていたが、きっとあのパパイアの木を見ていたに違いない。

後に彼は倉庫になったお爺さんの部屋からしわだらけの古新聞をみつけた。その新聞はすべて母親が市場で買い物時に包装紙としてもちかえったもので、お爺さんがわざわざごみ箱から拾って、丁寧に折りたたんで保存していたのだ。最近母親が紙価上昇で華字新聞をやめた後のある日、お爺さんは家の前に新聞配達員が通り過ぎるのを見て号泣したのだ。その夜、父親からお爺さんはとうとうパーキンソン病にかかったと、母親はこの病気は危険だと言った。しかし自分ではお爺さんの行動には別におかしいところないし、前回の号泣と最近よくごみ箱をあさって古新聞を

収集する癖がついただけのこと。お爺さんが家を離れた一週間後に、パパイアの花が咲き、彼はお爺さんが家に戻るまでこのパパイアの木を守ることを決心した。しかしある暴風雨の夜、彼は風に揺れているパパイアの木をみて、自分が懸命に華文で書いた手紙を見つめた。手紙には「お爺さん、お父さんがパパイアの木を切ると言っている。」と書いているのだ。

作者は作品において多数の問題提起をしている。華文しか読めないお爺さんの突発的な号泣と古新聞を集める行動に、旧移民世代の言葉の壁に対する寂しさを描写している。一般的に見られる老人問題の裏に、実は旧移民世代が深刻に抱えている言葉の障害が露呈されている。「華字新聞」を読めることで、さびしさが癒やされ、精神的孤独な老人たちを支え、問題の解決口になるだろう。しかし若く恵まれた世代のインテリの息子夫婦は、その根底にある原因を探らず、お爺さんの子孫に対する深い思いのあるパパイアの木を切ると考えている。お爺さんは現在の移民社会においては、もう時代に取り残された無用な煩わしい存在にすぎないと思われている。作者は老人問題に触れると同時に、この社会における「華字新聞」の存在とそれが華人社会における重要な精神的支柱である位置づけを示唆している。では「華字新聞」発行にあたって、研究資料をもとに、華人意識に関わる実際問題に触れてみたい。

原不二夫氏の「華字紙と中国」(注1)の文章において、次のような指摘がある。以下内容を略して引用する。戦後10年ほど、マラヤの華字新聞には中国を「祖国」と呼び、中国に関する報道はマラヤ同様の分量に占められている事実がよく知られている。この現象は政治的国民党、共産党時代に関わらず同じだった。1957年10月7日現地発行の新聞「南洋商報」において、「当雄」の署名で「わが国と中国の区別」という論文が発表された。その年の8月31日マラヤ連邦が独立したため、これまであった政治的名称は全面的に変えたのである。それによって「我が国」、「中国」の二つの名称は、在住華人にとって、精神的にも現実的にも確定を強いられた。この小論文は華字新聞及び華人一般のマラヤ意識の確立に、重要な指標を示したと考えられる。さらに原氏は同著において、華字新聞の休刊日を調べたところ、1990年代までは、中国社会の祭日を主に設定されていた。また華字新聞が使用する年号について、それまで中華民国の年号が使われ、中華人民共和国の成立により西暦に変えたのである。

このように実生活で旧移民世代においては、現地教育に受けていない実態より、心の底からこの「華字新聞」が生活の糧食と心の頼りであり、「我が国」が「中国」での意識の切り替えが困難であろう。中国の祭日で休刊日にすることも、心の中に確立された生活観とアイデンティティを主張していると考える。作品①に描写された割り切れない情景は、まぎれもなく今でも存在する現実であろう。次は老人の実生活を通して、作品①と同じ趣旨の作品を今一歩検討してみよう。

作品②:「お爺さんの帰りを待って誕生祝い」　君盈綠　(シンガポール)

もう夜の8時過ぎなのに、お爺さんはまだ帰らない。今日は彼の誕生日でお祝いをするため、家族全員が家で彼の帰りを待っているのだ。しかしいくら待っても帰ってこない。とうとう警察

から電話が入った、お爺さんを連れて帰ってほしいとの連絡だった。理由を尋ねると、お爺さんは「公共物破損」をしたそうだ。生涯良民であったお爺さんが、なぜ？と息子が首をかしげる。「今回は落書きだったので、注意だけにしたけど、次回からは法に従って処分する。」と警察官からおしかりをうけた。89歳にもなって、何をしているの？とお爺さんに問い詰めても無言のまま。だが突然、お爺さんは「お前、わしと中国語で話せないのかい？」中国語だって？親父さんは何をばかげたことを言い出すんだ？小さい頃少しだけ習ったことはあるが、ずいぶん長く使わないし忘れてしまい、話せるわけがないだろう？と息子は思った。

周りには誰も中国語を話す人はいないし、中国語の漢字もどこにも見かけない。だからわしは今日公園でペンキ職人のブラシを使って、電柱に書法で数個の漢字を書いたが、落書きと勝手に決めつけられ、どこが落書きなんだ？これは中国語の漢字だと説明しても、かれらは中国語の字はこんな乱暴に書くものではない、パソコンで打つ整然で綺麗な字だと全然聞いてくれないのだ。

お爺さんは怒りを抑えきれず、ますます激動する。息子は慰めの言葉を思いつかなかった。時代が移り変わり、華文がわからないのは自分の息子だけにとどまらず、周りの人たちもみな知らないようだ。しかし息子にとって、これは別に大した問題ではないし、なぜならここでこのままでも普通に生きられると思っている。

作品②と作品①が共通するのは、表面的には老人問題を描写しているようだが、底辺には旧移民世代、さらにこの地域における現代華人社会が抱えている世代間の言語問題の矛盾の露呈である。そして作品が取り上げた言語問題も単純に言語の壁を問題視しているわけではない。作品②に、お爺さん自分が書いた字が優れた伝統文化と思い、この社会に理解を求め認めてもらいたいといういらだちから、落書きという乱暴な形で強く自己主張したのだ。次に取り上げる作品も「華文」にまつわるテーマであるが、政治背景から生じる別の問題点が描写されている。

作品③：「書傷」　野蔓子　（マレーシア）

陳さんは地区の開発により自分の家が一軒の板屋から高層ビルに変わった。窓の外には木が見えないし500平方の家の生活にはどうしても馴染まないのである。特に家には入りきれず廊下に押し出された数個の古本の箱に対して申し訳ないと思っている。夜に目が覚めると、本からのため息が聞こえるような感じさえする。ある日、その本箱の上に乱暴な字で大きく陳さんの住所が書かれていた。そのわけは、隣人の家が住民から不要物の不法放置で苦情を受け、自分ところのものではないことを証明するため陳さんの住所を書いたそうだ。

図書館に寄付しょうと妻から提案されたが、図書館Ａからは：古い古典詩詞は若い人たちに読めないし、書棚に置くスペースがもったいないと。図書館Ｂからは：繁体字の本が多すぎるため、簡体字の本しか受け入れない。陳さん帰る時、後ろから「もし30年前だったら、お爺さんに失望させないけど」との言葉が聞こえた。

板屋を高層ビルに、繁体字が簡体字へと時代は振り返ることなく移り変わっていく。この本箱

はどこへ？と陳さんは誰かに拾うように期待して家路についた。３日後、あるインドの配達員から荷物と手紙が届いた。

「どうしてこんないい本が町に捨てられていたのはわからない。箱の住所を見て、早くあなたのところへ返すため配達を頼んだ。これらの本がこんなに大事に保存されて、中には既に絶版した本もある。あなたがこれらの本を失った心の痛みは、私はよくわかる。」

この作品は特にこの地域に関わる重要な政治的背景が見え隠れしている。現在中国語としては、本土が使用する簡体字と台湾が使用する繁体字の区別がある。マラア地域の華僑社会は中華人民共和国と国交関係を確立するまでは、中華民国（その後現台湾の国民党政府に続く）と深く関係を持っている。そして当時の国民政府も華僑社会の華文教育の推進に大きく力を入れ、海外の華僑学校用の教科書の編集及び提供など、積極的に「繁体字」による華文教育活動に参入していた。その後政治状況が変わり、中華人民共和国との国交成立により、華文教育の現場にも繁体字から簡体字に変わったのである。結果的に現地の中国系住民の中、華文教育を受けたとしても、世代によって、繁体字が読めないことも当然である。

作品③に両図書館から図書の寄付を断られた理由は、「古い古典詩詞は若い人たち読めないから、書棚に置くスペースがもったいない。」更に「繁体字の本が多すぎるため、簡体字の本しか受け入れない。」と言われている。その厳しい言葉が語る現実に対し、作者が陳さんに帰る時、後ろから聞こえた言葉「もし30年前だったら、お爺さんに失望させないけど」を加えて、この華人社会の旧世代が直面する現実をただ繁体字、簡体字の問題におさまらず、多面的問題点を示唆したうえ、空しく締めくくったであろう。時代の移り変わりはだれにも止めることができないし、時代の流れに順応していくしか生き残るすべがない。最後の部分に「これらの本がこんなに大事に保存されて、中には既に絶版した本もある。あなたがこれらの本を失った心の痛みは、私にはよくわかる。」と時代の流れに翻弄され、同世代同士の心底から発する共感が表現されている。

作品②の最後に「周りの人たちもみな華文を知らない、別にたいしたことではなく、このままでも普通に生きられるから」と息子が考えている現実の背後に、実は別な問題も示唆している。次はこの問題点を描写する作品④、⑤を見よう。

作品④：「舌を切る」　　晨夢子　（フィリピン）

啞者は生まれつきではなく、聴覚の障害によるものが多いと言われる。啞者には「間欠性」のものがあるのは意外と知られていないようだ。例えばこの「舌切る事件」がそうだ。

私は美金の小さいころに会ったことがあり、話したこともあった。当然彼女は啞者ではなかった。彼女の母親と親交があるため、彼女に対する印象は深かった。10年の歳月が過ぎ、私はほかの町に引越したある日、旧友王さんから美金の話を聞かされ、彼女はすでに中学生になったが、残念なことに、彼女は今「啞者」というあだ名が付いていると惜しい口調で言ったのだ。とんでもない、彼女は話もできるのに、なぜ？と私は納得できなかった。

「あなたも知っているように、私たちが住む小さい町の華人社会では、毎年一番困るのは華文教師が見つからないことだ。以前では、少しの交通費でも出せば、列ができるほど応募者が来るけど、現在は・・・」と王さんはため息をついて言った。「先生が見つからないからと言って、彼女の啞者とは何の関係があるの？」と私はさらに問い詰めた。「それは大いに関係あるんだ。先生が見つからないため、レベルの低い先生も採用するようになった。その年に来た先生は、年は若いが、授業もまともにできなくて、教室秩序の維持ができない状態だった。ある日教室もざわざわしてうるさいので、先生は学生たちに騒ぐと舌を切るぞと驚かせた。学生たちはまさか先生が冗談をいっていると思ってみんな笑った。すると、先生は美金のところまで近づき、彼女の顔を押さえて、舌を出させる動作を見せた。美金は大変驚いて、わ――と大声で叫びながら教室を飛び出した・・・。事件後、あの先生は姿を消したが、美金は啞者になり、話すことはなかった。」と王さん。美金の舌は傷ついたわけではないが、心の傷は深かったのである。

明らかにこの作品は、現地華文教育における現実問題の一側面がうつされている。シンガポール、マレーシアと違って、フィリピンでの華文教育はもっと厳しい環境にあるだろう。作者自身もフィリピンの華僑中学校で教師を務めているし、当然教育現場の現実はよく把握している。作品③までは老人世代の孤独感情と華文問題の葛藤だったが、現状として、作品④のように、若い世代がどのような現状と問題を抱えているのか作品を通して見てみよう。

作品⑤:「お箸」　艾禺　（シンガポール）

妻は食卓にフォークとスプーンを用意して、ほかに二人前のお箸を置いた。なぜ全員にお箸を用意しないのか？と彼は聞いた。すると孫がお箸を使えないのはわかっているでしょうと言い返された。華人がお箸を使えないのはいつのころから当たり前になっただろうか、彼は痛いほど記憶に残っている、小さいころ親から厳しくお箸の使え方をしつけられた。自分は一人息子に対しても箸の使い方を教えたが、自分が親のように厳しくしなかったため、この中華文化の伝統のお箸が忘れられ、孫にもちゃんと教えていないのだと彼は思った。

「華人ならお箸が使えるのは当然だろう。」と彼が言うと、「うるさいこと言わないで、２週間に一回ここに食事しに帰って来てくれるんだから、そんなこと言ったら今度帰ってこなくなるよ。」と妻が不満げにいった。・・・・・

食事中彼は我慢できず、「なぜお箸を使わないんだ？」と息子に問い詰めた。

「私たちはフォークとスプーンを使い慣れたから。」と嫁。

「お箸もなれるさ。」と彼。

「家でお箸は買ったことがないんです。」

「毎日じゃなくでもたまに使うようにすれば、華人だから、お箸を使えるのが当たり前だ。」

息子は黙ってしまった。「ものを食べられるなら、何を使ってもいいじゃない？」と妻。

「5000年の文化は本当に役に立たないのか？」彼は溜息をつきながら、お箸を眺めて言った。

「父さん知らないの？いま華文はもうＢになったよ！」と息子は淡々といいながら、フォークで肉の塊を彼の皿に運んだが、彼はすぐにお箸で受けた、二つの食具がぶつかって奇妙な音が聞こえた。息子はその音に反応しなかったが、彼にはその音が心の底をも震撼させたのだ。

この作品は作品④同様、現地華文教育の現実問題に触れている。作品⑤最後に息子が父親に話した言葉に「いま華文はもうＢになったよ！」とはシンガポールの教育制度で、現在学生が華文授業を受ける際、比較的内容が簡単な「華文Ｂ」科目を履修することも認めている。この現状に関して、作品⑤の作者艾禺氏の別の「膨らんだナマコ」の作品でもこの問題に触れている。旧正月に家族団らんの習慣を嫌がる息子一家から、家を買う頭金を助けてほしいとの相談を受けた。家買う理由とは、現在市営住宅に住み続けると、孫娘が進学する際、学校では差別されるそうだ。その理由に呆然として困惑を隠さない父親は「学校の勉強が住む家と関係あるのは私たちの世代では理解できない。それはまさに華文の勉強ができなければ、レベルを下げないといけないのと同じで、全くとんでもないことだ。」と反論する。当然、父親は家を買うのに反対してお金を出さなかった。そして、次の年の旧正月前に、息子から旧正月期間中は海外旅行に行くので、大晦日の一家団欒の食事はもう準備しなくていいと電話があった。そしてそれまで息子夫婦の新しい家に呼ばれることはなかったのだ。

両作品にはかなり具体的に現地の華文教育の実態と問題が提起されている。華文教育はただ華文が次世代でも読み書きができるだけの効果を求めていないことも作品からその意思、目的を示唆したと考える。要するに華文は、言葉と文字だけの表現ではなく、そこに華人たちが持ち続けたい文化思想、生活習慣であり、言葉を記憶する過程を通して、華人としてのアイデンティティを伝承し維持したいのである。研究資料(注2)によれば、リー・クワンユーらの人民行動党政府は、当初から植民時代の公用語である英語を多民族の現地における中立性を重視して、英語による教育を行う学校の比率を徐々に上げていた。70年代から二言語政策を打ち出し、さらに英語への傾斜が進んだ。80年代にはタミール語校、マレー語校、華語校の順に消滅するに至っている。この現象に英語学校に入学している華人たちの子供は英語で思考するようになり、「表面は黄色だが、中身は真っ白」とバナナに例えられた現象が進んだといえる。これを憂慮する政府は、1979年「家庭で華語を話そう」と言う華語運動キャンペーンを始めるが、実状1990年までの調査により、全華人で家庭で華語を話すのは３割ほどしかなく、英語学校では、各民族語を第２言語として必修としている。このように、シンガポールでは短い間に極端なまで文化の変容があったといえる。華人の家庭において、祖父母と話す言葉（福建語、広東語、マレー語）と、若い世代同士で話す言葉（英語)、華人同士で話す（華語）がそれぞれの場面で切り替わるという多文化状況に至っている。

上述で引用した資料の内容に多言語で使い分けする実態は、多民族社会において、一般的に見られる現象だと考える。しかしシンガポールの場合、華人たちの存在は特別な意味で位置づけされていることも事実である。実際シンガポールに限らず、マレー系社会全般において、華人が持

つ強力な経済力が、政治または社会紛争の不安材料になりかねないのである。よって、華人の現地化が常に彼らが直面せざるを得ない深刻な問題になっている。一方シンガポールの英語重視の二言語政策は、シンガポール人としてのアイデンティティ意識を強く固めることが目的であろう。国の政策は表社会のしきたりになるが、現に作品中描写されている内容は実社会の反映である。言語の問題は旧世代にとって、言葉の壁から生じる孤独感のほかに、自分たちのルーツである「中華文化」に対する誇りと執着が深いことは否定できない。若い世代については、作品⑤と「膨らんだナマコ」の作品が描写したように、学習者のレベルに合わせるため、華文教育レベルを下げる羽目になる状況から、現地の華文教育が重視されない事実が知れる。

以上作品を通して、華人社会における言語に関わるさまざまな問題を見てきた。次は華人のアイデンティティにつながる故郷への思いを描写する作品を見よう。

（二）思郷情緒の表現について

移民社会を描写するテーマに望郷情緒は欠かせないものであろう。この作品集にも同様な傾向がみられる。一般に望郷の情緒は、おおむね初代移民において多く見られる現象であるが、上述取り上げた作品の中、若い世代の華人意識に対する反発に対し、旧世代たちの無念な感情表現が多く見受けられる。だが若い世代といっても、彼らの思考はさまざまである。時代の流れに沿って、華人的生活感覚に反抗的意識を抱くこともあれば、華人意識が実生活を通して馴染み、自分の生活観として定着してしまうこともある。この章では、作品⑥と⑦を続けて取り上げ、旧世代と新世代のアイデンティティの違いを比較しながら、新たな問題点を探りたい。

作品⑥：「郷愁」　胡月宝　（シンガポール）

南普陀山を見るのは60年ぶりだ。彼は60年前同様、菩薩の前に跪いて合掌するが、昔は山の麓から一気に走って上ったが、今はもうできないのだ。

「お爺さん、これが船の上から見えたあの廟なの？」と登る途中から足が痛いと父親におんぶして登ってきた６歳の孫が彼に聞く。当時の自分と大違いだ。

暗い船艙に揺られて三日三晩吐き続けた。叔父さんの腕の中で、耳に怖くないよ、南普陀山はすぐそこにあるのだ、山の上の観音様はお前が無事に南洋へ着くのを見守ってくれる・・・お前がお金を稼げたら、必ず帰ってきて観音様にお礼をしないとね・・・

「父さんの名前で3000元奉献したよ。これが領収書・・いこう。ガイドが催促しているよ。」

故郷の集美と言う町に来たが、故居の前に徘徊するばっかりで昔の痕跡が全く残っていない。当初海外へ移民するのは、餓死から逃げるためだった。しかしこの60年間食べた味についてほとんど覚えていないのだ、ただ昔故郷で食べた「豚足うどん」の味だけが舌に焼きついている。

「豚足うどん」が来たよ。

南洋に着いたら叔父さんの言うことをちゃんと聞きなさいね。母さんが作った豚足うどんをちゃんと食べれば、無事に南洋に行ってまたもどれるからね。

「お爺さん何を食べているの？脂が浮いて、カロリー高いじゃない？」
「お前には何がわかるんだ、お爺さんが食べているのは郷愁・・・・」
「郷愁って？お父さんそれはなぁに？」「・・・・・・」
飛行機はシンガポールについた。飛行機から降りた３人はすぐにターミナルのマクドナルド店に飛び込んだ。６歳の孫は大口でコーラを飲み、ハンバーガをパクパク食べている、数日間の食欲不振が一気に解消された。
「お爺さん、郷愁の意味わかったよ、僕もいま郷愁を食べているんだ。」と孫が大声で言った。

作品⑦：「コップの割れ音」　朵拉　（マレーシア）

この店を通るたびにコップが地に落ちて割れる音が聞こえてくる。李蘊紅は方正強から茶坊へ行くこと誘われて、少し驚いて「茶坊へ？」と再確認したが、「そうだよ。」との返事だった。彼は午後にお茶を飲む習慣があったが、しかし彼は中国茶が嫌いだった。彼はイギリスの大学で勉強したころ、毎日午後甘くてミルクを入れた紅茶を飲むことが習慣だった。杏仁ケーキと紅茶の合わせが彼の大好物だ。李は紅茶も、更に杏仁の香も嫌いだったが、方のことは大好きだった。李は時々挫折感を覚えるが、恋愛のため妥協しなければと。二人は互いに中国茶と紅茶の優れた点をさまざまな知識を用いて相手に勧めるが、李も方も自分の嗜好を譲る気持ちはなく、相手を説得することができなかった。そこで今日彼のほうから茶坊へ行くと誘われて少々驚いた李は嬉しく感じたのだ。

二人は茶坊に入った。李はすぐに自分の好きな碧螺春茶を注文した。方にたずねれば、「何でもいい」との返事だった。彼にとっては、中国茶はどれも一緒と考えている。二人は付き合って一年あまりだが、彼には頑固なところがあると彼女は知っている。「中国茶もいいですよ」と李、「そう思うけどぼくは好きにならないのだ。」と彼は淡々と言った。お茶が運ばれてきた。「気をつけて、熱いから」と彼女が注意するが、「ああ・・・」やはりやけどをしそうだった。そして彼はたどたどしくいいだした、「最近僕は西洋茶が好きな女の子と知り合った。」「ああ・・・」李のコップが地に落ちて割れた音が聞こえた。二人は茶坊を離れたのち、別れたのだ。

作品⑥に描写されている世代間による食感覚の違いは、近年各地にファストフードの流行により、よくみられる問題である。だがこの作品のお爺さんと孫がそれぞれが食べる「郷愁」には、各自のアイデンティティに対する執着がうかがえる。お爺さんは移民後60年間の食経験があるにもかかわらず、悲惨な記憶を伴う豚足うどんが唯一印象深い味だと思い、彼の心の安らぎでもある。逆に現地生まれ育ちの６歳の孫に対して、今後お爺さん同様に華人としてのアイデンティティを持つことを期待するのは困難であろう。

さて、作品⑦の内容にたいへん興味深いものがある。普通お茶は個人の好みであり、家族の中でも違う嗜好を共存することは決して珍しくはない。この作品で、最も注目するところは、李と方それぞれが相手に自分の嗜好を妥協し譲る気持ちがない点である。お茶に対するこだわりは、

二人が別れる決め手になったが、ここもお茶の味だけの問題ではなく、その背後に存在する文化摩擦による自己主張だと考える。両作ともに若い世代に関わった内容であったが、「英語系華人」の文化意識を問題視している。この点に関して、作品⑥の作者の別の作品を見よう。

作品⑧：「祖先はいらない」　胡月宝　（シンガポール）

新しい家に引っ越して、家族全員が興奮しているのに、70歳の母親だけが困惑しているようだ。今回の引っ越しはとにかくものを整理しょうと決めた。室内の装飾も数万元ほどかかったし、みんな満足している。70歳の老母だけ壁紙に不満で、いつもあちこちの壁を眺めて考えている様子である。その日、仕事から家に帰ると、老母が釘を持って壁に穴をあけていた。壁紙まで破れている。「何をしているの？」「あなたのお父さんとお爺さん、お婆さんたちの遺影を飾ろうと‥」「こんなところに死・・いやお父さんやお爺さんの遺影かけるのは合わないよ、おかしいよ。」「あんたはあそこの壁に絵画をかけているのに、なぜ私がここにかけたらだめなの？」「それはおなじじゃないさ、この絵画は6000元もしたし、格調が高いもので、将来高く売れるの・・・お母さん今は、祖先の写真を飾るのはもう時代遅れだよ。」

壁を修理したが、老母が自分の部屋に閉じこもったきりだと、小学生の息子から緊急連絡が入った。すぐに家に戻ってみると、老母は部屋から出たが、「お婆ちゃん、なんで壁にこんなたくさんの老人写真を飾っているの？誰なの？」と孫。息子は吃驚しながら、「何度も言ったのに、全然聞かないから。こんなにたくさん写真持っても何にもならない。3回も引っ越して、毎回捨てようと言っても捨てないから。今回は最後だ、90年代の家は祖先の写真はいらないのだ。私たちに祖先はいらないのだ。」

「父さん、祖先って何？どうしていらないの？」

作品⑧のタイトル、そして最後の「私たちに祖先はいらないのだ」の後に、孫が父親に「祖先って何？どうしていらないの？」の問いかけでしめくくっている。若い世代の生き方と現実を描写して、華僑、華人社会の変容する実態に回答困難な疑問を投げかけている。

結　び

これまで具体的に作品を取り上げ、「華人」そして「華文創作」に焦点をあて、作者たちが描く東南アジア華人社会の問題を概観できた。文化摩擦にはさまざまな態容が存在する。文化摩擦が生じた場合、その違和感の処理の仕方が二方向ある。その優劣の意識を育みながら好奇心、畏敬、心酔と移行するが、または関心の喪失、拒否、軽蔑、自己の文化の押し売りと移行するとの指摘がある（注3）ように、作品集の内容にも多くみうけられ、描写されている。この作品集で触れた問題は、一般に見る文化摩擦のほかに、東南アジアの代表的マイノリティである華人のアイデンティティに、言語問題が深く関係する特徴がみえる。上述シンガポール政府が1979年、マラ

ヤ世界だけでは生きていけないという覚悟もあって、さらに生活スタイルと価値観がともに西洋化する中で、国民的統合イデオロギーとして、中国伝統文化の儒教規範が生活意識を調和できると期待され、華人は華語を使おうキャンペーンまで始まった事実を見ると、現地における華人意識の存続および文化伝承問題の多面性が知れる。

1992年にはすでに一冊の《世界華文微型小説大成》が出版されている。作者には東南アジア出身が少ない中、やはりシンガポール、マレーシア出身が目立っている。この作品集の出版主旨は「華文世界」と「世界の華文」の概念を突出するためと主張している。今回取り上げた作品集も含めて、華文創作の範疇に「世界」とうたえば、東南アジア華人の活躍が貴重であり、欠かせない存在である。近年中国現代文学における微型小説の発展が目覚ましく隆盛である。「華語」が国語でない地域の作者たちにとって「微型小説」は創作しやすい分野であろう。「華人」であり「華僑」ではない作者たちだが、今後も多くの華文創作活動を行うだろう。彼らの作品を通じて、現地華人社会の変容を知ることが期待できる。

注　釈

注１　《東南アジア華僑と中国》第２部第２章参照。
注２　《アジアの文化人類学》　第７章　「多文化接触と心理」　　中村俊哉氏の論文P106を参照。
注３　「文化摩擦」言葉を初めて使用する衛藤瀋吉氏1971年11月国際学研究会の報告を参照。

主な参考資料

《世界華文女作家微型小説選》	欽鴻　主 編	2004	上海人民出版社
《東南アジア華僑と中国》	原不二夫 編	1993	アジア経済研究所
《文化摩擦一般理論》	大林太良 編	1982	巌南堂書店
《アジアの文化人類学》	片山隆裕 編著	1999	ナカニシャ出版
《東南アジアの華人文化と文化摩擦》	酒井忠夫 編	1983	巌南堂書店
《新加坡馬來西亞華僑史》	林遠輝　張應龍 著	2008	廣東高等教育出版
《華僑》	游仲勲 著	1991	講談社

（せき　きりん：アジア文化学科　教授）